２０２１年１１月３０日（火）

老球の細道６４３号

１１月の言葉

会津バスケットボール協会　室　井　冨　仁

今月はバスケットボール関連のイベント（クリニック、Ｂリーグデイレクター、各種大会等）や父母の命日にちなむ法事が重なり、実に充実した月となった。特に会津高校と坂下ミニから数回のクリニックの依頼を受け、準備に関わりながら新しいドリルの開発ができた。終了後は後悔の念もさることながら次なる課題への情熱も沸々と湧いてくる。毎日アイディアを産む苦しみで悩み続けなければならないが、爺にとってはこれこそ生きる実感か。

１読書から

◆「窮屈であることが必要だ。人間はひきしめられるほどうまく行くバネのようなものだ」〈古賀英三郎著『人類の知的遺産・モンテスキュー』講談社〉：小人閑居して不善をなす、毎日何等かの不都合な真実や面倒な雑事に悩ませられながら生きてこそビールがうまい。

◆「自分の中に限界点を定めていない。自分で自分を評価しない。求める結果はベストを尽くした先にある。やることをやっていれば次につながると思っています」〈『文藝春秋オピニオン２０２２年の論点１００』〉：今シーズン二刀流で一世を風靡した大リーグ大谷翔平選手の言葉である。色々なところで「悪者をやっつけるのは“鬼滅の刃”、自分自身をダメにするのは“決めつけの刃”」と言ってきたが間違いでなかった。偉大なことはシンプルである。

２・新聞から

◆「次にどうするか、ということしか考えていない。常に誰かを目標にではなくて、敵は自分。常に前の日の自分を超えていく、という考え方で過ごしている」〈朝日：花巻東高校野球部監督・佐々木洋〉：大リーグ選手２人を育てた指導者の大谷翔平選手に対する感想である。天才を「わしが育てた！」と言う人が多い中、「指導したなどと恐ろしくて言えない」と謙虚に語る。偉大なる教え子に対して「おめでとうじゃなくて、ありがとう」だという。

◆「作家に余生はない。書くからこそ、空も青いと感じる。筆を執るのをやめれば、心も震えなくなる」〈朝日：天声人語〉：「生きることは愛すること」「情熱がなければ生きていてもつまらない」という言葉を残し、常識にとらわれず自由奔放な人生を送った故瀬戸内寂聴さんの言葉。未知なることは若さを保つ。老球において未知なる旅をまだまだ続けたい。

◆「年をとればとっただけのプレイはできるよ」〈月刊バスケットボール：島本和彦〉：神様マイケル・ジョーダンの言葉である。長年スポーツを継続している方々をたたえる「日本スポーツグランプリ賞」に今年は岩手県の油井康さんがバスケットボール界から表彰された。８６歳の今でもプレイをしているという。ちなみに日本最高齢選手は９６歳の在間さん。

◆「私たちの行いの真価は、その人たちの未来に発露する。即時の成果がないことを嘆くのならば、それは自分の欲求を満たすための行いであり、利他ではなく利己的な行為なのだ」〈朝日：朝からロック：中島岳志『思いがけず利他』〉：人を育てる生業に就く者は長い目、高い目で物事を見る。いつの日か「室井に習った」と人伝に聞くのが最高の喜びである。